

# 古琉球期那覇の三つの天妃宮：成立と展開、立地をめぐる

高橋，康夫 / Takahashi, Yasuo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007275>

## 古琉球期那覇の三つの天妃宮

—— 成立と展開、立地をめぐって ——

高 橋 康 夫

はじめに

古琉球の時代の那覇に、上天妃宮や下天妃宮、天尊廟、龍王殿など中国渡来の信仰の宮・廟があったことはよく知られている。<sup>①</sup>これらの宮・廟などのうち上天妃宮と下天妃宮は、琉球の宗教史のみならず、外交・政治・文化・貿易史上において重要な位置を占めているといつてよい。しかしながら、上天妃宮と下天妃宮の創建時期や時代背景、その後の変遷などを明らかにするのは、信頼しうる一次史料がほとんど残されていないため容易なことではない。

後述するように、琉球最初の正史である向象賢『中山世鑑』（一六五〇）をはじめ、蔡鐸本『中山世

譜』(一七〇一)、蔡温本『中山世譜』(一七二四)、『球陽』(一七四五)などの史書、また琉球最初の地誌である『琉球国由来記』(一七二三)の巻九「唐栄旧記全集」と、それに続く鄭秉哲『琉球国旧記』(一七三二)巻一所収の「唐栄記」などの地誌においても、明快な叙述はなされてはいない。また天妃(媽祖)信仰に関する包括的な研究書である李獻璋『媽祖信仰の研究』は上記の基礎的な問題を論じているが、天妃宮の創建と変遷の過程などについて、後に検討するようにいくつかの疑問を呈せざるを得ない。天妃宮の研究については、具体的な史実、事実関係でさえ明確にされたとはいえないのが現況である。<sup>③</sup>

大きな問題点として、古琉球から近世琉球にかけてのおよそ一世紀にわたって久米村の上天妃宮と那覇(狭義)の下天妃宮のほかに、もうひとつの天妃宮が波上の地にあったという事実が見落とされてきたことがある。久米村と那覇と波上、三つの天妃宮が同時代の那覇(広義)に併存していたのである。この事実はこれまで知られておらず、そのため天妃宮の変遷はもちろん、琉球外交史上に占める位置や意義などに少なからぬ誤解、混乱が生じているといわざるをえない。

そこで、本論ではこうした研究状況をふまえ、琉球史上重要な上天妃宮と下天妃宮に焦点を合わせ、所在地に着目しつつ、数少ない史料を再検討することによって、上記の課題の解決に多少なりとも資したいと考える。<sup>④</sup>

## 一 久米村と上天妃宮

『琉球国由来記』の「唐栄旧記全集」は二〇箇条からなり、そのうち一〇箇条が下天妃廟・上天妃廟・龍王殿・天尊堂・孔子廟・関帝廟の沿革や祭祀の記述にあてられている。<sup>73</sup> 唐栄、すなわち渡来系琉球人の集住する久米村の人々の信仰の中核をなしていたのは、あらためていうまでもなく中国大陸に由来する上天妃廟・下天妃廟・龍王殿・天尊堂・孔子廟・関帝廟であり、しかもこれらを管理していたのも唐栄の人々であった。<sup>74</sup> したがって「唐栄旧記全集」においてこれらにかかわる記述が半ばを占めているのも当然のことといえよう。

「唐栄旧記全集」に記された年間の行事をみると、上下の天妃宮と天尊廟、龍王殿の祭祀は聖誕の日が異なるだけであって、ほかはほぼ共通している。<sup>75</sup> ただ天妃宮のみ、聖誕の日に大夫から若秀才まで天妃経をとねえるのは大きなちがいといえよう。さらに上元節のあいだ、久米村の大門と西門、上天妃宮、下天妃宮にそれぞれ「結采門」一座を立てることも注目される。これらは上元節の「美観に備ふ」ための装飾であったが、<sup>76</sup> 南の大門、北の「西門」（「西」は実際の方位としては北を指す）とともに、東の上天妃宮、西の下天妃宮が久米村の要衝を占めていたことを示している。こうした点から上下の天妃宮に対する信仰が久米村の祭祀の中核であったとみてよい。

「唐栄旧記全集」は、とくに航海安全と雨の祈願について項を立てて記載する。天尊が「護国庇民

の天神」、龍王が「風雨の神」であることから、天尊・龍王二廟において祈雨の祭祀も行われる。通常と大旱の時とで祭祀の内容が異なるが、共通するのは、久米村の大夫以下七人が廟ごとに焼香し、「太玉樞宝経」など、三つの経をとなえることである。<sup>⑨</sup>

那覇や久米村の人々にとってとりわけ重要な航海安全については、上下の天妃宮・天尊廟・龍王殿において祭祀が行われる。<sup>⑩</sup>進貢船が船出すると、久米村ではその日から七日のあいだは、天妃二廟において大夫から若秀才にいたる人々が焼香し、天妃経をとなえ、その後、天尊・龍王二廟において焼香し、祈禱する。その次の日より帰国の日まで毎日、大夫以下、若秀才・郷官士まで輪番で四廟に拝禱する。天妃二廟と天尊・龍王二廟においていずれも航海の安全を祈るのであるが、航海の安全が信仰の中心である天妃二廟のほうに、より重みがあるといえよう。

ところで、このような「唐栄旧記全集」の記載内容は、いわば久米村の公式年中祭祀というべきものであつて、久米村の住人や冊封使たち、さらには航海にかかわる人々の信仰のありようはそれとは少し異なるものがあつたにちがいない。冊封使などによる使琉球録は、それぞれ具体的に彼らの上天妃宮への信仰を記している。たとえば一六三三年の冊封使杜三策の従客として琉球に渡つた胡靖の『琉球記』は、冊封使たちはその往還に際して久米村の上天妃宮において五昼夜にわたつて祈禱を行うのが慣例化していたという。<sup>⑪</sup>上天妃宮は冊封使たちにとって航海儀礼の重要な場となっていたのである。航海の無事を祈る冊封使の儀礼が、少なくとも一六〇六年の冊封使夏子陽の代以前にさかのぼること

も読み取ることができる。これも久米村上天妃宮の重要性を示すものといえよう。

また、一六八三年の冊封使汪楫の『使琉球雜錄』は上天妃宮について、「使臣、朔望には必ず肅謁して香火す。下宮（下天妃宮）に視ぶるに較盛なり」（原文は漢文、また括弧内は引用者による注記、以下同様。）と述べる。<sup>(12)</sup> 胡靖のように「琉球への往復に際して五昼夜にわたって祈祷する」とは書かないが、冊封使たちは毎月一日と十五日にはかならず参拝して焼香するとし、下天妃宮に比べると少し盛んであるというのも、下天妃宮の「圯に就く」姿、つまり破れかけている姿と比較して興味深い。<sup>(13)</sup> 一七一九年の徐葆光『中山伝信録』も「天妃宮行香」として、

入館の後、吉を涓び鼓樂儀従して、船上の天妃及び拏公拏公は水神なり、汪使の使録中に詳らか、諸海神の位を奉迎して、上天妃宮内に供す。朔望の日には行香す。<sup>(14)</sup>

と述べている。孔子廟や天尊廟については天使館に入って二日目に行つて焼香するが、朔望に焼香することはないというから、毎月一日と十五日の参拝と焼香は、上天妃宮に限られていたのである。要するに、冊封使にとつて大切な廟は上天妃宮なのであり、それは下天妃宮や天尊廟、孔子廟とは異なつた重要さをもっていたといえよう。

この点をさらに考えておこう。「唐榮旧記全集」そして「唐榮記」によると、関帝廟が一六九一年に上天妃宮の廟内に新築されたこと、またもともと那覇の津の仲三重城にあつた龍王殿が十八世紀初頭には上天妃宮の敷地にあつたことがわかる。<sup>(15)</sup> 上天妃宮は、龍王殿や関帝廟を内包したことによつて

久米村の信仰の中心になったのではなく、もともと久米村の信仰の核であったからこそ、関帝廟の新築や龍王殿の移築が行われたのである。このように上天妃宮とその地が中国渡来の信仰にかかわる複合的な、また大きな意味をもつ場所であったことにも注目すべきであろう。

上天妃宮の場所の意味についても一つ付け加えることができる。「唐榮記」は所在地情報を記載するのが大きな特徴であるが、それによると、上天妃宮が「在唐榮村中」、龍王殿が「在天妃廟内地」、関帝廟が「在上天妃廟内」とあり、他方、下天妃宮が「在唐榮・那覇之境」、天尊廟が「在唐榮西門（唐榮の北方にある門のこと）外」とある。つまり下天妃宮と天尊廟は唐榮の外に位置したのであって、龍王殿と関帝廟を含む上天妃宮のみが唐榮のなかにあった。渡来系琉球人の生活空間のなかに営まれていたのは上天妃宮だけといってよい。唐榮・久米村にとって、とくに上天妃宮が重要であったことの一端を示すものであろう。

最後に、上天妃宮・下天妃宮・天尊廟・龍王殿・孔子廟・関帝廟など六つの宮・廟の創建年代についてごく簡単にふれると、孔子廟が一六七四年に竣工したこと、また関帝廟が一六九一年に創建されたことは明らかである。残る上天妃宮・下天妃宮・天尊廟・龍王殿については、通説では第一尚氏王朝の尚泰久の時代に鑄造された鐘の銘から上天妃宮・下天妃宮・天尊廟は十五世紀半ばには存在していた、また龍王殿も同じ時期に創建されていたと考えられている。古琉球の時代、十五世紀半ば以前にさかのぼるとみてよい。<sup>18)</sup>

## 二 天妃宮の外交機能

天妃宮が琉球王国の外交機能を担っていたというのは周知のことに属するが、その実態が十分に明確になっていないというわけではない。というのは、近年においても、琉球王府の重要な外交文書集である『歴代宝案』が「天妃宮」に所蔵されたと説明されるが、それが久米村の上天妃宮なのか、那覇の下天妃宮なのかは、意外なことにあいまいなままなのである。『沖縄県の地名』（平凡社、二〇〇二）は、「上天妃宮跡」の項において、

王府の外交文書は天妃宮に保管されていたが破損散失のおそれがあり、康熙三十六年国相向弘才・法司（三司官）向世俊らが蔡鐸らに命じて「歴代宝案」を編纂させた（『歴代宝案』序文）。この編纂事業は当宮で行われたようで、同年四月四日より始め十一月三〇日に完成した（梁氏饒波家家譜・「歴代宝案」）。「歴代宝案」は二部作成され、一部は首里城、もう一部は天妃宮に保管された。（括弧のなかの注記は原文のまま）。

と説明する。以下の議論のため、この説明が依拠している『歴代宝案』（一六九七年に編纂が完了）の序の冒頭を引用しておこう。

歴代宝案は天妃宮に蔵し、其の来たれるや久し。（中略）、旧案を重修し、抄して二部と成さしむ。一部は四十九本なり。一部は王城に上り、一部は天妃宮に蔵す。康熙三十六年丁丑四月四日より

起こし、十一月三十日に至り告竣す。<sup>19)</sup>

『沖縄県の地名』の説明が「天妃宮」を総称的に用い、上天妃宮と下天妃宮の区別を明示しないのは、『歴代宝案』の序の記事にしたがったからであるとともに、どちらか判然としなかったからであろう。にもかかわらず「上天妃宮跡」の項に説明をおいたのは、先の引用に続いて「とくに上天妃宮はこの後も外交文書作成を行う事務所として機能していたようだ」とあるとの推定によるものであろう。

『歴代宝案』の序などにみられる「天妃宮」という表記の意味は、その当時の人々にとっては自明であつたにちがいないが、現在では不明といわざるをえなくなっている。上天妃宮と下天妃宮の成り立ち、機能、特質の違いを考えると、また琉球王府の外交を考えると、外交機能を担ったのは上天妃宮なのか、下天妃宮なのか、両方なのか。これはかならずしも小さな問題ではないように思われる。

この問題に言及した李獻璋は、『中山世譜』の記事を抛りどころにして、第一尚氏王朝の尚巴志が永樂二十二年（一四二四）に下天妃宮を創建したと考える。そうして尚巴志が下天妃宮を創建した理由として、琉球王府が冊封使の航海安全の祭祀を掌握しようとしたこと、「貢賜貿易の公所」、すなわち外交・貿易機能を担う役所を必要としたことをあげる。下天妃宮の創建と機能の推定にかかわって、李獻璋は現存の『歴代宝案』が永樂二十二年に始まること、「歴代宝案は天妃宮に蔵し、其の来たるや久し」を重視しているが、<sup>20)</sup>『歴代宝案』が下天妃宮に所蔵されたかどうかという点については、李獻璋自身も「この廟（下天妃宮……引用者注）に收藏せられたといふ明・琉間の関係文件」と記述す

るだけであつて、明らかな論拠は示されていないのである。

ともあれ、この李獻璋の説は広く受け入れられたようであるが、先に述べたように近年になって『沖縄県の地名』が異なる説を提示している。私もまた、少なくとも近世においては上天妃宮が琉球王府の外交文書を作成、保管し、その集成である『歴代宝案』を管理、所蔵する役割を担った場所であつたと考える。この点についてすこし検討してみよう。

一九九四年に刊行された『歴代宝案』訳注本第一冊は、前掲『歴代宝案』の序の「天妃宮」に注を付して、那覇の上天妃宮は天使館の東にあり、「国中案牘、多儲於此」と『中山伝信録』にある。『歴代宝案』第一集の編集もここで行われた。

と説明し、李獻璋と同じ下天妃宮説をとっている。さらに参照すべき事項として注で示されているのは、梁邦基（久米村梁氏、饒波家、九世）と金溥（久米村金氏、阿波連家、十世）の略歴、そして『歴代宝案』編集にかかわる家譜の部分である（以下、原文を読み下して引用）。

梁邦基……康熙三十六年丁丑四月初四日、歴代入貢寶案残缺に因り、法司の令を奉りて、同鄭宗徳宮城親雲上・鄭明良港川親雲上、抄を督せんが為め、日に天妃宮に上り、十一月三十日に至りて抄して二部と成さしむ。一部四十九本。一部は王城に上り、一部は天妃宮に藏す。金溥……予等、毎日天妃宮に于き選抄す、九月二十六日に至り、存留通事と為るに因りて告辭す。以上の史料ではいずれもただ「天妃宮」とのみ書かれ、上天妃宮か下天妃宮か、内容からも区別を

付けることができない。それにもかかわらず訳注者が下天妃宮が『歴代宝案』を所蔵し、そこで第一集の編集も行われたと断定したのは、李獻璋の説に加えて、汪楫『使琉球雜錄』と徐葆光『中山伝信録』の下天妃宮の説明に「國中案牘、多儲於此」とあつたからであろう。しかし、「國中の案牘、多くは此に儲ふ」とは「琉球国の宗門改めの木札は多くここにたくわえられている」という意味であつて、<sup>①</sup> 外交文書や『歴代宝案』の所蔵とはなんの関係もなく、したがつて下天妃宮と結論づける根拠とすることはできない。むしろ下天妃宮が宗門改めなど内政機能にかかわる施設であつたことを明確に示すものである。この事實は、外交機能を担い、『歴代宝案』を所蔵し、その第一集の編集が行われたのが上天妃宮であることを強く示唆しているのではなからうか。

これに加えて、上天妃宮と考えるのが妥当なくつかの理由を挙げてみよう。一つは、近世ではたんに天妃宮といわれるとき、久米村にとって重要な上天妃宮を意味することが多いからである。たとえば久米村の鄭謙が撰した「琉球国創建天尊廟天妃宮龍王殿閔帝祠総記」（以下「総記」と略称）を見ると、文章の中に最初に現れる天妃宮は下天妃宮のことであるが、その後、宮、あるいは天妃宮とある計三箇所は明らかに上天妃宮を指している。したがつて、歴代宝案の「天妃宮」は下天妃宮ではなく、上天妃宮であるともみるのが自然であろう。また、梁氏家譜において天妃宮へ行くのに「上る」と書かれていることも手がかりの一つであり、平坦地にある下天妃宮ではなく、上天妃宮の立地にふさわしい表現である（第四章3節参照）。

少なくとも一六九七年当時に『歴代宝案』の原史料を所蔵し、また『歴代宝案』第一集の編纂作業が行われたのは上天妃宮である。「歴代宝案は天妃宮に蔵し、其の来たるや久し」を素直に解すると、おそらく一六九七年以前、古琉球の時代に遡って上天妃宮が『歴代宝案』を所蔵したのである。逆に、一六九七年以後も上天妃宮が『歴代宝案』を所蔵し続けたことは、上天妃宮に懸けられていた徐葆光の聯（一七一九年）に、

全海の洪波を統べ、俯して人情に順い、應に東西南北を念ずべし。

歴朝の寶冊を綜べ、仰いで聖徳を覘い、一に忠孝慈仁を心とす。<sup>(23)</sup>

とあることから証される。この徐葆光の聯は「歴朝の寶冊」、すなわち『歴代宝案』の編纂と上天妃宮の關係、ひいては上天妃宮が外交・貿易機能を担う役所であったことを示すもつとも確かな史料といえよう。

付け加えるなら、『沖縄県の地名』も記すように、十九世紀においても外交文書を作成する場合は上天妃宮であった。「咸豐五年（一八五五）乙卯六月中日記」の六月九日付の文書には、「上之天后宮（上天妃宮）之儀、先例漢字御右筆方并通書役詰所ニテ御座候処、（中略）漢字方之儀、当時唐工之御狀調方及数通、夫々手配を以書調、且通書役も追々仕口取懸申事候処」と、その役割の一端が記されている。<sup>(24)</sup> 上天妃宮は、あらためて指摘するまでもないが、十七世紀以降、外交文書を作成したり、『歴代宝案』の編纂・所蔵にあたるようなところではなかった。先に述べたように、徐葆光『中山伝信録』に「国

中の案牘、多くは此に儲ふ」とあり、また親見世役人の詰め所となつてゐることからうかがわれるように、琉球王府の内政、住民支配を管掌してゐたと考えるのが妥当である。近世において上天妃宮と下天妃宮は、天妃信仰の場であるとともに、琉球王府の行政機関として上天妃宮が外交、下天妃宮が内政というように、ある意味で対極的な王府の機能を担つていたのである。

李獻璋の説は近世においては妥当性を欠くといわざるをえないが、古琉球の時代、とくに第一尚氏王朝の時代に限定するならば、史料の裏付けが必要ではあるものの、現時点で想定できる有力な作業仮説と考えられる。そうすると、外交機能の担い手が古琉球の下天妃宮から近世琉球の上天妃宮に代つたことを認めなければならぬが、こうした変化はいつ、どのようにして生じたのであろうか。新たな問題を考える必要が生じている。

### 三 天妃宮の所在地

下天妃宮にも徐葆光の書いた聯がかけてゐた。それには「那覇と唐營、兩宮を並峙して上下に分つ」とあり、那覇の下天妃宮と唐榮（唐營、久米村）の上天妃宮が並び立つ状況が端的に語られている。本章ではこれらの所在地をより詳しく検討するとともに、それらとは異なる天妃宮が波上の地に存在したこと、しかも三つの天妃宮が同時代の那覇に併存してゐたことを明らかにする。これにより汪楫

や徐葆光、周煌が眺め、『琉球国由来記』などが記す、那覇の下天妃宮と久米村の上天妃宮が並び立つ姿が、歴史的な変化の所産であることを示し、那覇における天妃宮の創建と変容を考える準備作業としたい。

## 1 那覇の下天妃宮

下天妃宮が天使館の東隣にあったことは、すでに先行研究によって明らかであるが、再確認の意味で、前節であげた史料の他にいくつかの使琉球録の記事を引用しておきたい（以下、渡琉年・筆者・書名・本文の順に記す）。

・一六三三年、胡靖、『琉球記』、「由館前横道左行、則天妃廟」

・一六八三年、汪楫、『使琉球雜錄』、「天妃宮有二、下天妃宮與天使館隣並」

・一七一九年、徐葆光、『中山伝信録』、「琉球天妃宮有二、一在那覇、曰下天妃宮、天使館之東、門南向」<sup>(26)</sup>

・一七五六年、周煌、『琉球国志略』、「天妃宮有三」<sup>(27)</sup>「一在那覇、天使館東、曰下天妃宮、門南向」  
下天妃宮は定説のように近世を通じて同じところ、「那覇」の天使館の東にあったと考えてよい。<sup>(28)</sup>  
また明治初期にも同じ位置にあった。<sup>(29)</sup>

さて、徐葆光と周煌が所在地を「那覇」と書き、また久米村住人鄭秉哲の「唐栄記」が下天妃宮の

所在地を「在唐榮・那覇之境」と記していることが注目される。これらから第一に、下天妃宮は唐榮（久米村）に立地していなかったこと、そして第二に、「唐榮記」の記述によるならば、下天妃宮が那覇東村と久米村の境界の地に立地していたという興味深い事実を指摘することができる。さらに「唐榮記」が、隣接する天使館の所在地についても「在那覇・唐榮之境」とすることが注意される。那覇を構成する東村・西村・泉崎村・若狭町村のいずれにも属さず、久米村にも属さない下天妃宮や天使館は、なにか特別の理由のもとに造営されたことを示唆しているのであろう（第四章1節で検討する）。

## 2 久米村の上天妃宮

上天妃宮は、久米村人による「唐榮記」が「唐榮の村中に在り」と記し、冊封使たちも同様に、徐葆光『中山伝信録』が「上天妃宮、在久米村」、周煌『琉球国志略』が「一在久米村、曰上天妃宮」とする。したがって上天妃宮の所在地は一見単純な問題のようにみえるが、具体的に久米村のどこにあったかを史料に即して簡明に叙述するのは、じつは容易なことではない。窪徳忠が李獻璋の研究に依拠しながら、次のように述べていることから、難しい状況がうかがわれよう。

唐榮にあった二廟の位置について、下天妃廟に関しては天使館の隣と諸書の記載が一致しているのに対して、上天妃廟に関しては孔子廟の右（『使琉球雜録』）、天尊廟の東（『中山紀略』）、曲巷（『中山伝信録』）などと不一致の上に、嘉手納宗徳復元の明治初年の那覇の古地図には下天妃宮の隣り、

具志堅以徳作の大正末期の「久米村歴史・民俗地図」では下天妃宮跡とは離れた天妃小学校近くに画かれるなど（『那覇市史』資料編第二巻中の七、九二〜九三頁）、さまざまである。私にはよくわからないが、重修の際に位置を移したのではないかと憶測している。<sup>30</sup>

李獻璋は多くの史料を引用して考察するのであるが、上天妃宮が一貫して天妃小学校敷地にあったと先験的に考えており、そのために史料解釈の混乱をきたし、その結果「よくわからない」といわれる事態に陥っている。以下では、上天妃宮の関連史料を検討しなおし、前近代における上天妃宮の所在地とその移動を明らかにしたい。<sup>31</sup>

最初に述べたように、上天妃宮が十八世紀中ごろに久米村にあったことは確かな事実といつてよい。そして一八〇〇年に来琉した冊封副使李鼎元の『使琉球記』には、

東禪寺に遊ぶ。寺は久米の東北に在り。前は下天后宮（上天後宮の誤り）に臨み、後は平山に倚り、六松盤すること磊の若し。<sup>32</sup>

とある。李鼎元は「下天后宮」と記すが、しかしそれが「上天後宮」とすべきところを書き誤ったものであることは、下天妃宮が久米村の西に位置したこと、上天妃宮が久米村の東に位置したことから明らかである。さて東禪寺は久米の東北にあった。この事実は徐葆光『中山伝信録』に「東禪寺、在久米東北」とあることから知られる。したがって李鼎元の記述は、上天妃宮が久米村の東北にある東禪寺の前に立地していたことを明確に示しているといつてよい。

この上天妃宮が天妃小学校の位置に移った時期を明らかにする史料は今のところ見いだしていないが、一方、いつごろから久米村の東にあつたかについては多少の史料が残されている。一六八三年の冊封使汪楫の『使琉球雜錄』は、上天妃宮を次のように描写する。

上天妃宮は、孔子廟の右に在り。深く曲巷を行き、巷を夾み悪石を墨ねて墻と為す。石面は皆髑髏の如し。……宮外は石埠轟起し、墻壁巍然たり。内に榕樹有りて、垂蔭すること数畝なり。<sup>33)</sup>

汪楫によると、上天妃宮は、一六七四年に泉崎橋のたもとに建設された孔子廟の右にあつたという。この位置は、李鼎元が記した場所とほぼ一致する。

さらに「唐榮旧記全集」もあげているように、一六三三年の冊封使杜三策の従客胡靖の『琉球記』の記事「湖に沿ひて東し、山半を陟れば、天妃新殿あり」が知られている。これによると、天使館から「湖」すなわち漫湖に沿つて東に進み、山半を登ったところに「天妃新殿」、上天妃宮があるという。およその立地がわかるが、これも汪楫や李鼎元の記載と同じ位置と考えてよい。

以上から、上天妃宮は少なくとも一六三三年から一八〇〇年まで同じ場所にあつたと考えてよいであろう。<sup>34)</sup>久米村の上天妃宮は一五六一年にこの場所に創建されたと筆者は考えるが、この点に関しては第四章3節において詳細に検討することにした。

## 3 波上の天妃宮

一六六三年に琉球に渡った冊封使張学礼の『中山紀略』には、

那覇の東北三里に三清殿（天尊廟）有り。……三清殿の東に天妃廟有り。廟は窄隘と雖も、幽邃  
観る可し。廟の東に演武場有り。（演武場の）南に長虹橋有り。<sup>35</sup>

とある。三清殿とは天尊廟のことであり、それが波上の近くにあつて波上権現・護国寺に隣接していたことは諸記録から明らかである。<sup>36</sup> その天尊廟の東に天妃廟があつた、と張学礼は記録に残しているのである。演武場やその南の長虹橋などとの位置関係においても矛盾がないので、天妃宮が天尊廟の東にあつたとの記事は正しいものとみることができる。そうすると、明らかにこの天妃宮は、那覇の下天妃宮とも、久米村の上天妃宮とも異なる廟ということになる。この点をさらに確実にするために、天妃宮の堂内に掲げられた冊封使の額から考えてみよう。

『中山紀略』によると、張学礼は、重陽節の宴の日、琉球国王尚質に請われて首里城正殿の額に「東南屏藩」、家廟の額に「河山帶礪」、そして三清殿と天妃宮の額にそれぞれ「蒼生司命」と「中外慈母」を書いた。<sup>37</sup> 『中山紀略』にはこの波上の天妃宮以外に天妃宮の記事はないのであるが、徐葆光『中山伝信録』や周煌『琉球国志略』には、張学礼が那覇の下天妃宮や久米村の上天妃宮を訪れ、その額の字も書いたことが記されている。『中山伝信録』によると、下天妃宮の神堂の中に張学礼・王垓の「普

「濟羣生」があり、また上天妃宮の堂内にも同じ張学礼・王垓による「生天福靈」があつた。<sup>(38)</sup> 張学礼は、波上と那覇と久米村の天妃宮を訪ね、それぞれに額を残しているのである。

以上から、十七世紀中ごろの波上に、久米村の上天妃宮とも、那覇の下天妃宮とも異なる天妃宮があつたことは明白な事実であり、あらためてこれを波上の天妃宮とよぶことにしよう。

#### 4 「琉球図」にみる天妃宮

一六三三年の胡靖『琉球記』をみると、胡靖は「琉球記」において前述のように「天妃新殿」（上天妃宮）と「天妃廟」（下天妃宮）に言及し、また琉球を描いた「琉球図」にも「新殿」と「天妃廟」を描いた。両者を比較して、第一に「新殿」が「天妃新殿」（上天妃宮）と一致すること。第二に「琉球図」の「天妃廟」が、「琉球記」に天使館の「前の横道より左行すれば、則ち天妃廟なり」とある「天妃廟」⇨下天妃宮とは明らかに異なること、すなわち「天妃廟」が波上の天妃宮の描写であることを指摘することができる。さらに胡靖「琉球図」が久米村の上天妃宮と波上の天妃宮を描写し、那覇の下天妃宮を描かなかつたことも注目される。

このような描写の特徴は一六〇六年の冊封使夏子陽『使琉球録』に掲載された「琉球過海図」にもみられる。夏子陽の『使琉球録』は、本文では琉球の天妃宮について言及しないが、夏子陽らは那覇の下天妃宮と久米村の上天妃宮を訪れ、「靈應普濟神祠」の額をそれぞれの門に立てているし、<sup>(40)</sup>「琉球

過海図」一九葉の図の一つ（第九葉表）に久米村の「天妃宮」を描いている。この場面は中央から左下に大きく描かれた天使館が主題であり、天使館のほかには、中央右、つまり東方の丘陵をこえたところに「三十六姓營中」（久米村）を描き、その上方、東北にあたる小高い山の上に「天妃宮」を描き込んでいる。一方、天使館の右に隣接する下天妃宮が描かれていないのが注意を引く。夏子陽にとつて下天妃宮はことさら描くに値しないとの評価があつたのかもしれない。

胡靖は「琉球記」では久米村の上天妃宮とともに那覇の下天妃宮を取りあげ、また夏子陽は現実の行動では久米村の上天妃宮と那覇の下天妃宮の両方に額を掲げている。徐葆光が「那覇と唐營、兩宮を並峙して上下に分つ」というように、公的には（あるいは表面的には）那覇の下天妃宮を無視したりすることはできなかったであろう。しかしながら、冊封使たちにとつて本当に大きな意味があつたようにみえるのは久米村の上天妃宮であり、さらには波上の天妃宮であつた。このことは両者の創建や沿革について重要な関連があつたことを暗示しているのではなからうか。

#### 四 天妃宮の創建

古琉球の時代にも久米村の上天妃宮と波上の天妃宮は併存していたのであろうか。一四五七年に鑄造された鐘の銘にみえる「上天妃宮」は、久米村の上天妃宮なのか、あるいは波上の天妃宮なのか。

併存していたのではないとすれば、久米村の上天妃宮と波上の天妃宮の関係はどのようなものであったか。一方が他方の後身なのか。両者は那覇の下天妃宮とどのような関係にあったのか。さまざまな疑問が生じてくる。ところが、基礎的な情報源である「唐栄旧記全集」や「唐栄記」、「総記」、「中山世譜」、「球陽」などは、いずれも久米村の上天妃宮と古琉球の上天妃宮とを同一視し、さらには久米村の上天妃宮を波上の天妃宮の系譜に連なるもの、というよりも同一の敷地・由来をもつ上天妃宮として理解、あるいは誤解している。これらはいずれも久米村知識人の常識ないし伝承による記述であって、そこには十分注意を払う必要がある。そして同様のことは、前記の地誌や史書の叙述をほぼそのまま踏襲した李獻璋を初めとする研究論文についてもいいうることである。ここではそうした情報源のありかたに留意しながら、那覇・久米村・波上の三つの天妃宮それぞれの変遷と相互の関係を考えてみることにしよう。

# 1 那覇の下天妃宮の創建

「唐栄旧記全集」は那覇の下天妃宮の創建について、拠るべき史料がほとんどなく、ただわずかに廟内に「永楽二十二年造」という七字を書いた古い板があると記しているだけである。<sup>①</sup>この点に関連して東恩納寛惇は、「久米村例寄帳、雍正九年（一七三二）五月廿七日の文書に依ると、下の天妃宮仏壇の内板に「永楽二十二年造」の文字があつた」と述べている。<sup>②</sup>今、板の文字も一七三一年の文書も

確認する術はないとはいえ、拠るべき一つの手がかりと考えてよいであろう。「唐榮旧記全集」はこれと「景泰丁丑年」、すなわち一四五七年の銘のある鐘が伝わることに依拠して、「永樂年間」にこの廟がつくられたことは疑いないとする。永樂二十二年（一四二四）としないことが注意されるが、「唐榮記」も同じ内容を記しているので、これが久米村の理解であつたとみてよいようである。

ところで、世上に流布し利用されることの多い『球陽』は、先行する「唐榮旧記全集」・「唐榮記」の永樂年間とする説を採らず、尚巴志王の三年、すなわち永樂二十二年（一四二四）の条に「下天妃廟を創建す」の項目を掲げる。そして「天尊廟・上天妃廟・竜王殿を創建す」を付け足し、その根拠として、「杜公録」の「天尊廟は昔琉球に移住した閩人すなわち福建出身の人々が祀廟を創建して国のために福を祈つた。これから考えると、上天妃廟・竜王殿もまた同じ時に建立されたものか」とする。<sup>(43)</sup>

しかし「杜公録」、すなわち一六三三年の冊封使杜三策本人の記録は知られておらず、その従客であつた胡靖の残した記録が、『琉球記』として北京の国家図書館に、また『杜天使冊封琉球眞記奇観』としてハワイ大学のハミルトン図書館に現存しているだけであり、それらには『球陽』の前掲引用文は存在しない。近い内容の文を載せるのは、汪楫『使琉球雜録』であり、すでに示したように「天尊廟は、（中略）、相伝うるに、永樂中、貢使、京師より塑像して以て帰り、持れば必ず応ずる有り」とである。

『球陽』の引用文は、実はいわゆる蔡温本『中山世譜』（二七二四年）の尚巴志王永楽二十二年条の「本年輔臣に命じて下天妃宮を創建す」の割注に、

杜公録云、天尊廟、昔閩人移居中山者、創建廟祠、爲國祈福。以此考之、上天妃廟・龍王殿、亦此時建之歟。

とあるものと同じであり、『球陽』は項目全体をそのまま借用しているに過ぎない。蔡温がなぜ誤った史料引用を行ったのかはわからないが、ともかくも、蔡温や『球陽』の編著者鄭秉哲など十八世紀の久米村知識人は、琉球に移住した閩人が彼らの信仰のために十五世紀前半ころに上天妃廟と天尊廟、竜王殿を創建したと考えていたことは確かである。

一方、下天妃宮の創建事情はまったくちがうものとされる。尚巴志王が下天妃廟を創建したと記述する蔡温本『中山世譜』、それを祖述する『球陽』は、とくにその根拠を示していないが、これらによった通説においてほぼ歴史的事実と理解されてきた。そして李獻璋の説の影響があるのであるが、「尚巴志が積極的に媽祖信仰の保護策を打ち出したのは、冊封使一行や在琉華僑への優遇策の現われであると同時に、外交機構の整備を目指したものである」などと評価されてきた。<sup>43</sup> このように考えることは、当時の状況からみておおむね妥当なように思われるが、やはり史料の裏付けが必要であろう。十分な証拠とはいえないまでも傍証となりうるのは、少なくとも近世において下天妃宮と天使館が隣り合って建っていたこと、またその敷地がともに那覇東村・西村や久米村などの都市域に含まれて

いなかったこと、境界の地にあり、あえていえば公的・共有の場、「公界」に所在したことであろう。<sup>(45)</sup> おそらく第一尚氏王朝の尚巴志王代に遡るこのような立地の特異性は、下天妃宮と天使館が特別の配慮のもとに設置され、維持されたことを示唆している。下天妃宮と天使館はともに補い合つて琉球王府の重要な国家機能を果たす施設なのである。天使館が国家の迎賓施設、冊封使の居館であることから、<sup>(46)</sup> 下天妃宮も同じく国家の宗教・外交施設として設置されたと考えられよう。これこそ第一尚氏王朝時代の下天妃宮のもっとも注目すべき特質である。こうした特質をもつ「天妃宮」と天使館を那覇に建設した主体として当然のように想定されるのが、十五世紀初頭に三山を統一した尚巴志なのである。

このように下天妃宮を位置づけてよいとすると、『歴代宝案』第一集の内容が実質的には洪熙元年（一四二五）の文書より始まるという小葉田淳の指摘は、<sup>(47)</sup> その創建年時と関連してあらためて注目される。そして尚巴志の冊封使柴山の渡琉が同じ洪熙元年であることも忘れてはならない。蔡温はおそらくこうした知識も有していたのであろう。『中山世譜』や『球陽』に記される、下天妃宮永樂二十二年（一四二四）建立説は、編年体の史書としての叙述の都合という以上に、的の中心を射ているように思われる。

古琉球期の国家の宗教・外交施設としての下天妃宮という位置づけからさまざま生じる疑問は、近世琉球における下天妃宮のありかたと大きな相異、変化があるということである。この問題は第五章

において検討することしよう。

## 2 波上の天妃宮の創建

一六六三年の冊封使張学礼がみた波上の天妃宮についてその創建に遡って考えてみたい。一四二五年に尚巴志を冊封するために琉球に派遣された柴山はその後またたび琉球を訪れ、三度目の琉球滞在となる宣徳五年（一四三〇）に航海の無事を感謝して海岸の南に大安寺を創建し、また宣徳八年（一四三三）に大安寺に隣接して千仏靈閣を建てた。これらは、柴山自身が記した「大安禅寺碑記」・「千佛靈閣碑記」によって広く知られている。<sup>⑧</sup>

これまでも注目されてきたように「千仏靈閣碑記」には「是に於て弘仁普濟の宮を重修し、泉を引き、井を鑿ち、宮の南に大安・千仏靈閣を鼎造す」とある。<sup>⑨</sup>「弘仁普濟」とは一四〇九年に中国の皇帝が媽祖に与えた称号であり、したがって「弘仁普濟の宮」とは天妃宮のことである。<sup>⑩</sup>柴山は天妃宮の修理を行い、そして天妃宮の南の地に、天妃宮と鼎の位置を占めるように、大安寺と千仏靈閣を建立したというのである。この大安寺は、「大安禅寺碑記」に「地を海岸の南に得たり」とあることから、波上の護国寺の近くにあったと推定されている。<sup>⑪</sup>これに加えて、およそ北から南へ波上権現と護国寺、天尊廟が並び立っていたこと、また前掲の張学礼『中山紀略』に「三清殿（天尊廟）の東に天妃廟有り」とあるのを考え合わせると、「千仏靈閣碑記」の「弘仁普濟の宮」と『中山紀略』の「天妃廟」を同

じものとみるのが自然な考えかたであろう。こうして波上に所在する天妃宮の沿革は、すくなくとも一四三三年にまでさかのぼることになる。

ところで「千仏靈閣碑記」の前掲引用文中には天妃宮を「重修」とある点が注目される。波上の天妃宮がすでに「重ねて修理すること」を必要とするほどの状態であったというのである。破損の状況はまったくわからないが、海辺にあつて傷みややすく建立から修理までわずか十年ほどしか経過していないとしても、その建立時期は下天妃宮の創建時期とされる一四二四年よりも古くなる。波上の天妃宮が下天妃宮よりも古い可能性が高いとみるのが常識的であろうし、国家の宗教・外交施設として造営された下天妃宮よりも、波上の天妃宮の創建時期が早いと考える方が、逆の場合より状況としても自然ではないか。

波上の天妃宮の創建は、一四二四年の下天妃宮よりも早く、十五世初頭、あるいは十四世紀末であったと考えられる。「弘仁普濟の宮」が創建当初の名称であるならば、その創建は早くとも一四〇九年ということになる。いずれにせよ、琉球で最初の天妃宮である可能性は少なくあるまい。『中山世譜』が「天尊廟、昔閩人移居中山者、創建廟祠、爲國祈福。以此考之、上天妃廟・龍王殿、亦此時建之歟」とするように、この天妃宮は東アジアの海域で交易に従事する人々に支えられた、民俗的・土俗的な祭祀施設であり、那覇の天妃宮のような国家的な性格はもっていないかつたであろう。

### 3 久米村上天妃宮の創建

ここでは「唐榮記」や、汪楫『使琉球雜錄』、徐葆光『中山伝信録』、周煌『琉球国志略』などが久米村（唐榮）の村中であつたとする上天妃宮の創建について、波上の天妃宮との区別に留意しながら検討する。

一六三三年琉球に渡つた胡靖の『琉球記』は、久米村の上天妃宮にかかわる興味深い記述「湖に沿ひて東し、山半を陟れば、天妃新殿あり。郭公より造まる」をのせている。<sup>52</sup>これからいくつか重要なことを指摘することができる。第一に、「湖」すなわち漫湖に沿つて（天使館から）東に進み、山半を登つたところにあるという立地の状況から、この「天妃新殿」が汪楫『使琉球雜錄』が孔子廟の右にあると記す久米村の上天妃宮であることは明らかである。また、張学礼『中山紀略』が波上の天尊廟の東にあつたとする「天妃廟」、すなわち波上の天妃宮ではないことも明らかである。この点を確認しておく必要がある。

第二に、天妃の「新殿」が「郭公自り造（はじ）まる」とあることに注目したい。一五六一年に尚元の冊封正使として琉球に来た郭汝霖が久米村の上天妃宮を創建したと胡靖はいうのである。郭汝霖の『重編使琉球録』には琉球の天妃宮についての記載がなく、また蕭崇業・謝杰『使琉球録』や夏子陽『使琉球録』にもないから、胡靖の情報源は琉球の人々、おそらく久米村の人々と考えざるほかないであらう。

これらをふまえて久米村の上天妃宮の創建について考えたい。「唐榮旧記全集」には、

有遺老伝説云。後于下天妃廟而建焉。見其鐘銘文、于景泰八年鑄之。拠此考之、雖後于下天妃廟而建、而二廟相去、決不遠焉。想必宣德・正統間、創建斯廟也明矣。

但 欽差杜公録云。「沿湖東而陟。山半有天妃新廟。造自郭公。」今、考夫郭公、乃係于嘉靖四十年勅使也。此与鐘銘、先後齟齬。恐杜公誤矣。不然則、廟壞階崩、或係郭公所重修也歟。

とあつて、まず指摘すべきことは、十八世紀初頭の久米村では上天妃宮の創建について確かな史実が知られておらず、わずかに二つの史料によつて推測するしかなかったということである。一つは上天妃宮に所蔵される景泰八年（一四五七）鑄造の鐘の銘であり、もう一つは「杜公録」、すなわち胡靖の『琉球記』の記事、とくに「郭公自り造（はじ）まる」である。創建の時代についてこれら二つの史料には一見して矛盾するところがある。そこで「唐榮旧記全集」では鐘銘を重視する一方、胡靖『琉球記』の記事を全面的に否定し、あるいは郭汝霖の重修かと推測して、矛盾を解消しようとしている。

こうして「唐榮旧記全集」は、景泰八年の鐘銘に「上天妃宮」とあり、また同年の下天妃宮の鐘銘に「天妃宮」とあることから、上天妃宮は下天妃宮におくれて創建された、それが宣德・正統年間（一四二六―一四四九）のことであるのは明らかという。創建期の所在地について、「唐榮旧記全集」はなんら言及しないが、およそ二〇年後の著作である「総記」は創建の年代と場所について、宣德・正統の間に上天妃宮を「営中」すなわち唐営（久米村）の中に重建したと断定している。<sup>33</sup> 宣德・正統年間

に久米村の地に上天妃宮が創建され、一四五七年にこの宮の鐘が鑄造されたというのが、おそらく「遺老の伝説」、つまり久米村の常識となっていたのであろう。したがって、胡靖『琉球記』の「郭公自り造まる」という記事については、一四五七年に「上天妃宮」の銘のある鐘が鑄造されたことと齟齬があり、胡靖『琉球記』の誤りではないかといいい、あるいは廟が荒廃していたので、郭汝霖が重修したのかとして、結果的に無視することになる。「唐榮旧記全集」が胡靖『琉球記』の記事を全面的に否定するのは、久米村の伝承からしてある意味で当然のことなのかもしれない。以上のようなみかたは、李獻璋をはじめとする先行研究にも受け継がれているといつてよい。

しかしながら、そのように考えた場合にいくつもの疑問が生じてくる。冊封使や久米村の渡来中国人が深く関与し、これらの人々の信仰を集めたとみられる波上と久米村の天妃宮が、同じ創建の時代、十五世紀前半に併存したとするのは不自然ではないか。また十五世紀前半の文献史料から那覇と波上に天妃宮があつたことを知ることができるのに、同時期の久米村の上天妃宮についてはまったく文献史料が残されていないのは奇妙ではないか。要するに、十五世紀の前半に久米村の地に上天妃宮が創建されたと考えない方がよいのではないか。さらに研究上の問題点として、基本的に第一級の有益な史料である胡靖『琉球記』の上天妃宮や下天妃宮の創建・沿革の記述があまりにも簡単に否定されていないか。上天妃宮や下天妃宮の記述はおそらく久米村の人々からの聞き取り情報というべきものであり、活用することが求められるのではないか。

久米村の伝承そして先行研究には疑問の余地が十分にあると考え、以下、検討を進めたい。

宣徳・正統の間に上天妃宮を久米村に創建したという「唐榮旧記全集」や「総記」の記述は、宣徳八年（一四三三）の柴山「千佛靈閣碑記」に「弘仁普濟の宮を重修」とあるのに拠ったのであろう。しかし、それは明らかに波上の天妃宮についての記述であり、久米村の上天妃宮とはまったく関係がない。創建の時期についても、またその場所についても「唐榮旧記全集」や「総記」には波上の天妃宮との混同があり、信頼しうるものではないと考えられる。

また景泰八年鑄造「上天妃宮」銘の鐘の伝来について疑問を提出することもできる。この鐘は、本来は波上の天妃宮に掛けられた鐘ではなかったか。久米村には中国人あるいはその子孫が集住し、一方那覇や波上には琉球人や日本人が雜居したという<sup>34</sup>。久米村の上天妃宮の鐘と那覇、波上の寺院・廟の鐘のあいだには、こうした地域社会の特色やちがいを反映した鐘の形式や造営過程がみられるはずである。この点を検証してみよう。

十五世紀後半、尚泰久王（在位一四五四〜六〇）の時代には仏教興隆政策のもとで数多くの鐘が鑄造され、仏教寺院をはじめ天尊殿・天妃宮・上天妃宮など道教的な信仰の建築などに懸けられた。いずれも和鐘の形式であるという。「上天妃宮」銘の鐘も、これらの鐘の一つである。上天妃宮と下天妃宮、天尊殿、大安寺など十九の鐘について銘文が判明しているが、それによると、鐘はいずれも尚泰久の寄進であり、また銘の本文は相国寺の住持である溪隱安潜の作ったものがすべてに用いられている。

資料の少ないこの時期にあつて、これらの鐘銘は貴重な同時代史料となつてゐる。那覇の寺院や廟を中心に、とくに鑄造に際して勸進などにあたつた奉行、鐘を鑄造した大工などを検討した結果を要約し、また上天妃宮と下天妃宮、天尊殿、大安寺について述べると、次のようになる。<sup>55)</sup>

① 奉行の与名福と中西是那覇の十二の寺院・廟・神社のうち十に関わる。

② 天尊殿の住持は日本人真言僧「権律師良舜」であつた。<sup>56)</sup> また大安寺の住持「秀英」も、建立後まもないころの住持受林正棋が国王尚巴志の任命した「日本国の僧」であつたことからすると、日本人の可能性が高い。天尊殿と大安寺は、創建において中国と深い所縁をもつにもかかわらず、日本人の僧侶が住持を務める。その信仰の基盤である波上や那覇の地域社会との関係を反映するものであらう。

③ 天尊殿の鐘の大工藤原国吉は、智賢・与那福・中西と組んで普門寺・広嚴寺・龍翔寺の鐘などを鑄造している。このほか王家にかかわる仕事、また京都出身の有名な禅僧芥隠承琥や琉球国王の護持僧溪隱安潜などの宗教界の有力者の関係する寺院などの仕事も多い。

④ 上天妃宮・下天妃宮・大安寺などの鐘の大工衛門尉藤原国光は、与那福・中西と組んで那覇の地域の仕事をしている。宗教界の実力者や王家と関連する仕事はない。

以上から、那覇や波上などの寺院・廟の鐘の鑄造に関係したのは琉球の人と大和の人であつたといえよう。これらは当時の那覇、波上の地域社会、住民の構成を反映しているものと考えられる。

そして下天妃宮や上天妃宮の鐘の鑄造に久米村、渡来中国人の直接的な関与はみられないといつてよいであろう。とくに上天妃宮の鐘が、那覇の他の鐘と同じ和鐘であり、同じように那覇の奉行と大和の土工のもとに鑄造されたという事実は注目に値しよう。中国から渡来した人々の集住する久米村に天妃宮があつたと仮に考えても、中国の伝統を保守する彼らの天妃宮の鐘の造営に琉球と大和の人がかわり、その形式が和鐘であるなどは考えがたい。要するに、「上天妃宮」銘の鐘は、久米村の上天妃宮のものではなく、波上の天妃宮に寄進され掛けられたと考えるほかないであろう。

以上の検討から宣徳・正統年間に久米村の地に上天妃宮が創建され、一四五七年にこの宮の鐘が鑄造されたという「唐榮旧記全集」などの伝承には少なからぬ疑問があることが判明した。したがって本節冒頭で検討した胡靖『琉球記』の記事、

湖に沿ひて東し、山半を陟れば、天妃新殿あり。郭公より造まる。

の史料価値を再評価し、久米村の上天妃宮についてその創建と沿革を構成し直す必要がある。

天妃「新殿」という胡靖の表現に着目すると、郭汝霖が天妃宮を建立して以来およそ七〇年が経過しているのであるから、それが新しい建物という意味ではないことは明らかである。したがって旧来の天妃宮とは異なる、またそれと代わる新たな天妃宮が創建されたという意味で、「新殿」が使われていると理解せざるをえない。要するに、胡靖によるこの文は、一五六一年に渡琉した郭汝霖が久米村の地に「天妃新殿」を創建したと素直に解釈するのが妥当であろう。徐葆光『中山伝信録』も、「唐

栄旧記全集」に拠ることはせず、胡靖の記述を採用して「此れ嘉靖中の冊使郭給事汝霖の建つ所なり。他に碑記無く証す可し」と書いている。<sup>57)</sup> 徐葆光『中山伝信録』は「崇禎六年、杜三策の従客胡靖の記、尤も俚誕（俗っぽいでたらめ）」と厳しく胡靖『琉球記』を批判するものであるが、その徐葆光が胡靖に依拠していることは、胡靖による久米村天妃宮の記述の妥当性を補強するものといえよう。周煌『琉球国志略』もまた徐葆光の説を踏襲し、「嘉靖中の冊使郭汝霖の建つ所なり」とする。これがその後の通説的な理解となったといつてよい。<sup>58)</sup>

一五六一年、郭汝霖が久米村の地に「天妃新殿」<sup>59)</sup> Ⅱ上天妃宮を創建した。これを歴史的事実と認めると、当初の疑問のいくつかに答えることができる。まず第一に、久米村の上天妃宮が取って代わった旧来の天妃宮とは、波上の天妃宮にはかならない。第二に、一四五七年の鐘銘にみえる「上天妃宮」が久米村の天妃宮でないことはいうまでもなく、したがって波上の天妃宮こそが古琉球の「上天妃宮」ということになる。

## 五 天妃宮の変遷

一五六一年の久米村天妃宮の創建とその後の展開は、波上と那覇の天妃宮のありかたに大きな影響を及ぼした。とくに那覇の下天妃宮は本来もっていた外交文書の作成・管理という重要な機能を奪わ

れることになるのである。変化の大きな流れは久米村と那覇の天妃宮の呼び方の変化からもうかがえる。下天妃宮の正式な名称は、少なくとも創建されてから十五世紀なごころまで、一四五七年の鐘銘に「天妃宮」とあるように、たんに「天妃宮」であつた。近世以降ではたんに天妃宮というと上天妃宮のことが多い。呼び名の推移は那覇の下天妃宮と久米村の上天妃宮の役割の転換、琉球王府における位置づけをはつきりと映し出しているのである。下天妃宮が内政を、代わつて上天妃宮が外交を担うという役割の転換は、いつ、誰によつてもたらされたのであろうか。

# 1 下天妃宮

下天妃宮の姿は一四五七年以後長期にわたつて明らかではないが、近世の冊封使たちが残した記録から古琉球時代の状況が多少判明する。胡靖の『琉球記』は、下天妃宮について「嘉隆の間（嘉靖・隆慶年間、一五二二～一五七二）より創まるも傾頽を覚へ、略修葺を加ふ」と記述する。<sup>59</sup>これは天妃宮の建築の建立、修理にかかわる興味深い内容をもつ記述であるが、従来はこの「嘉隆の間より創まる」を胡靖が下天妃宮の創建を記したものと解し、明らかに誤りであると批判されることが多い。しかしこれは文意から、創建時期ではなく、胡靖がみた下天妃宮の建物の建立時期を説明したものと解すべきであろう。嘉靖・隆慶年間に再建されたが、その後数十年を経て傷みが進み、そのため簡単な修復を加えたということである。

神堂の建立時期は、「嘉隆の間」を字義通りに解すると、嘉靖元年（一五二二）から隆慶六年（一五七二）にいたる半世紀に及ぶ期間となり、漠然としすぎていてあまり意味をなさない。胡靖はもう少し短く嘉靖末年から隆慶初年にいたる期間をいったものとみてよいのではないか。いいかえると、隆慶元年（一五六七）前後、あるいは嘉靖四〇年（一五六二）あたりから十年ほどのあいだに神堂が再建されたと述べているのであろう。

郭汝霖が久米村に天妃宮を創建したのが一五六一年であり、これとそれほど年月を隔てずに那覇の下天妃宮が再建されていることには何か関連がありそうに思われる。もちろん、下天妃宮の神堂が再建を必要とするほど荒廃していたからに過ぎないかもしれないが、久米村上天妃宮の創建にともなう那覇下天妃宮の再建、すなわちある意味で創建ともいうべき一連の事業である可能性もあるのではないか。

## 2 波上の上天妃宮

前述のように一四五七年に「上天妃宮」の名称が刻まれた鐘が鑄造され、当宮に寄進されたことが知られている。袋中上人が著した『琉球神道記』（二六〇八）の巻第五に、

又上ノ天妃宮、近ゴ口南蛮走ノ船、久ク帰ラズ。性テ菩薩（天妃）ニ数人參籠シテ、此音信ヲ聞  
ント祈リ上ル。聖前ニ、粟ヲ盛、木筆ヲ加テ置ニ、日中ニ聖手、木筆ヲ執テ、書テ云、海難而倒

翻卜。後二首尾ス。

とある。袋中のいう「上ノ天妃宮」は波上の上天妃宮である可能性が高い。というのは、袋中のもう一つの著作『琉球往来』には「米村（久米村）天妃殿」という表現が使われているからである。那覇に住んでいた袋中は、自身の生活体験にもとづいて波上の上天妃宮と久米村の天妃殿を区別していたと考えてよいであろう。

波上の上天妃宮の信仰は、航海中の船の安否を伝える天妃の特異な能力によるところが大きかったであろう。「南蛮走ノ船」にかかわる情報を求めて参籠した人々を、かならずしも渡来系琉球人に限って理解する必要はないであろう。袋中は那覇に居住して広く航海にかかわる者の信仰としてこの上天妃宮の話を伝えたものと思われる。

その後の波上の上天妃宮については、前述のように一六六三年に冊封使張学礼が来訪して「中外慈母」の書を残し、「窄隘と雖も、幽邃観る可し」と記したことのほかは、ほとんどわからない。その後の冊封使たちは、汪楫も、徐葆光も、周煌も、李鼎元も、みな久米村の上天妃宮と那覇の下天妃宮について言及するのみで、波上の上天妃宮についてまったく触れるところがない。

もともと波上の上天妃宮にあった一四五七年の鐘も、「唐采旧記全集」が編集された一七一三年にはすでに久米村の上天妃宮の所蔵となっていたようである。この意味で、久米村の上天妃宮は波上の「上天妃宮」の系譜を引くということもできよう。『球陽』の尚質王十一年（二六五八）の条「始めて二

天妃宮の、曉暮に撞鐘することを定む」には、

景泰年間、巨鐘を鑄て以て両天妃宮に懸く。而して天后を祭祀するの時、鐘を撞きて拝礼するのみ。是の年に至り、始めて曉暮、鐘を撞きて、以て時刻を報ずることに定む。<sup>(9)</sup>

とある。「両天妃宮」のうち、一つが下天妃宮であることは自明であるが、もう一つが波上か、久米村かは検討の余地がある。しかし次項で明らかになるように、久米村の上天妃宮は十七世紀前半には下天妃宮とともに王城の儀礼に組み込まれていたから、この天妃宮も久米村の上天妃宮と考えざるをえない。したがって波上の上天妃宮にあつた景泰年間の鐘は、一六五八年以前に久米村の上天妃宮に移されていたと推定される。波上の上天妃宮はその信仰と歴史のシンボルを奪われた時点で、事実上廃絶したといつてもよいのではないか。

一六六三年に張学礼がみた波上の上天妃宮は、「窄隘と雖も、幽邃観る可し」であつたにしても、それはある意味で抜け殻のようなものであり、歴史の表舞台から姿を消すのも時間の問題でしかなかった。

### 3 久米村の上天妃宮

十七世紀初頭における久米村の天妃宮を語る史料として、袋中の著した『琉球往来』所載の次の書状がある。『琉球往来』はいうまでもなく往来物の一つであり、この書状も文例の一つに過ぎないが、

しかし『琉球往来』の内容はたんなる虚構の文例集ではなく、袋中が琉球に滞在した時期（一六〇三～五年）の那覇や若狭、久米村などの状況が反映されている。この書状もそのように扱いうるものであり、そこには、

願は米村（久米村）天妃殿を学校と為す。三十六姓の秀才等、常に琢磨せしむれば、何ぞ玲瓏の機無しや、

という文が含まれている。袋中滞在当時の久米村に天妃宮が存在していたことが知られるとともに、さらに天妃宮を学校にして久米村の若者の教育の場としたいという願いのなかに天妃宮のもつ地域社会的な意義がわかる興味深い史料といえよう。<sup>6)</sup>

『球陽』尚豊王五年（一六二五）「法司官一員官役等を率いて諸社寺に到り福を祈る」の条に収められた「遏達理双紙」の天啓丁卯（一六二七）元旦および十五日における諸社寺参詣の記事をみよう。

城に進みて四拝す。已に畢りて、波上山権現・天尊廟・広厳寺・冲山権現・両天妃廟・龍王殿・長寿寺神社・天久山権現・崇元寺廟・神徳寺・八幡神社・荒神堂・円覚寺廟に拝謁して、以て聖躬万歳、子孫繁栄、国泰民安を祈る。亦、城に進みて九拝す。

那覇・首里の地理を考えると、これはたんに社寺を羅列したのではなく、参拝の順路を示したものと解することができる。具体的にいうと、法司官以下の人々は首里城を出て波上へ行き、波上の波上山権現・天尊廟・広厳寺から那覇の冲山権現・下天妃廟、久米村の上天妃廟・竜王殿、イベガマの長

寿寺神社、泊の天久山権現・崇元寺廟、安里の神徳寺・八幡神社、首里の荒神堂・田覚寺廟の順に巡り、首里城へ帰ったのである。これによって上天妃廟・竜王殿が久米村にあったことが確認されると同時に、久米村の上天妃宮が下天妃宮、天尊廟、龍王殿とともに国家的な宗教儀礼の中に組み込まれている姿が判明する。

創建からわずか数十年後の十七世紀初頭には久米村の天妃宮は、久米村においても、琉球王府においても、確固たる位置を占めていた。さらにいえば、一六〇六年の冊封使夏子陽の「琉球過海図」は、この当時すでに久米村の天妃宮が那覇の下天妃宮を凌駕する地位に到達していたことを暗に示しているのではないか。おそらく久米村の天妃宮が琉球王府の外交文書の作成や、十五世紀以来の外交文書の保存管理などの場として機能していたにちがいない。一六九七年の『歴代宝案』の序に「歴代宝案は天妃宮に蔵し、其の来たれるや久し」とあるのもそれを裏付けていよう。

こうして久米村の上天妃宮は、那覇の下天妃宮と波上の上天妃宮からそのもつとも重要なもの——外交機能と宗教機能——を吸収し、鼎立でもなく、並立でもない、唯我独尊ともいうべき独自の立場を占めることになった。

## 結びにかえて

郭汝霖が久米村の地に「天妃新殿」を創建した理由を示す史料は残されていない。単純に憶測するならば、久米村の人々や大使館に滞在する冊封使たちにとって波上の地が遠く不便であったこと、また信仰の上から彼ら自身による彼ら自身のための天妃宮が身近な場所に必要とされたこと、などがあげられよう。しかしもっと大きな政治的・社会的理由があったにちがいない。上天妃宮と下天妃宮が一五六〇年代にあいついで新築、再建されていること、国家の宗教・外交施設として設置された下天妃宮の役割が近世初頭以前に上天妃宮に移管されていること、これらには久米村の人々の意図が反映していないはずはないが、むしろ一連の国家的動向の所産とみるべきではないか。

その動向とは、一四六九年の金丸（尚円）のクーデターによる、第一尚氏王朝から第二尚氏王朝への交替である。その後、尚円から尚真、尚清、尚元へと続くあいだに実施された新体制固めの一環として、前王朝の尚巴志が創建した古い下天妃宮に代わり、第二尚氏王朝の新しい天妃宮を必要とする政治状況が生じたのであろう。波上の上天妃宮を王府の宗教・外交施設とするには、それが冊封使の信仰を得てはいたものの、渡来系琉球人のみならず那覇に居住する琉球人や日本人による民間の宗教施設という歴史のしがらみがあった。そこで冊封使郭汝霖の渡来を契機に久米村に上天妃宮を新造し、外交文書の作成・保存・管理などの業務を行わせたのではないか。上天妃宮創建の事情は、下天妃宮

と共通したものがあつたのであり、王朝の交替にともなう制度の衣更えとみる事ができよう。

最後に、天妃宮と華人街の形成との関わりについても述べておきたい。アジアの海域では各地に華人街が形成されているが、それは天妃宮と深いかかわりをもっていたとい<sup>63</sup>う。古琉球の場合、特別の創建事情を持つ天妃宮を別にして、波上の天妃宮と久米村の天妃宮について閩人による集落形成との関連を想定することができよう。天尊廟や天妃宮、大安寺などが建立された波上において、華人街のあつた可能性は少なくあるまい。いいかえると、那覇の中国人集住地は久米村だけではなかつたと、ある時期に波上から久米村の地への移転が生じたことなどの仮説をたてることができよう。

ところで、一六〇六年の冊封使夏子陽の『使琉球録』に、

夏子陽曰、余聞諸琉球昔遣陪臣之子進監者、率皆三十六姓。今諸姓凋謝、僅存蔡、鄭、林、程、梁、金六家、而族不甚蕃。故進監之舉、近亦寥寥。大夫、長史、昔以誦詩學禮者充之。故多彬彬禮讓。今僅取奔走濫觴匪人、則末流漸失矣。三十六姓者、昔所居地曰營中、今強半邱墟、過之殊可慨焉。とあることはよく知られている。いわゆる閩人三十六姓の衰微を記し、蔡・鄭・林・程・梁・金の六家が残るのみで、「營中」の半分以上が廢墟となつていたという。よく利用される史料なのであるが、これまでずっと「三十六姓者、昔所居地曰營中、今強半邱墟」とある「營中」を、久米村と誤解してきたことに問題があろう（久米村は古琉球の時代から近代まで同じ地にあつたと考えられている）。この字句は、十七世紀初頭、閩人の後裔が久米村に住んでいることを前提として、三十六姓の昔の居

所の地が「営中」であり、それが今では半ば以上廃墟になっていると理解するのが妥当である。夏子陽は、華人街の変遷を伝えているのである。ここで「営中」、すなわち昔の華人街を波上の天尊廟と天妃宮近くに考えるのは自然な見方であろう。波上から久米村への移動時期についても久米村天妃宮の創建の前後と考えてよいのではないか。古琉球の那覇における華人街の形成、さらには都市形成は琉球史の大きな課題であり、稿をあらためて検討することにした。

【註】

(1) 窪徳忠『増訂 沖縄の習俗と信仰』（東京大学出版会、一九七四年、初版は一九七一年）の「三 沖縄の道教神」（一八五頁～二七九頁）。

(2) 李獻璋『媽祖信仰の研究』第三章「唐人の琉球定住と媽祖の伝来」（泰山文物社、一九七九年）。初出は「琉球への唐人移住と媽祖の伝来」（『東方學』第二十二輯、一九六一年七月）。琉球における天妃宮を論じ、ほぼ網羅的に史料をあげ、多くの論点を取りあげてはいるものの、現時点では誤り、修正・補足すべきところが少なくない。とくに久米村の上天妃宮の所在地についての誤解は、その論述に大きな影響を与えている。

(3) 天妃宮を解説した早い時期の著作として、田山花袋編『琉球名勝地誌』（博文館、一九〇一年）の「天女祠」、吉田東伍編『大日本地名辞書 北海道、樺太、琉球、台湾』（富山房、一九〇二）の「天妃」がある。『大日本地名辞書』の琉球を担当した東恩納寛惇は後に増補修正して『南島風土記——沖縄・奄美大島地名辞典

- 『(沖縄文化協会・沖縄財団、一九五〇年)を刊行している。このほか、窪徳忠前掲書の3章3節「天妃」(二三頁～二五二頁)、野口鐵郎「那覇久米村の天妃廟」(『南島史学』第二五・二六号、一九八五年九月)があり、比較的最近のものに窪徳忠「道教的信仰習俗と琉球」(『アジア遊学』第一六号、勉誠出版、二〇〇〇年)、都築晶子「琉球における道教的信仰」(『アジア遊学』第一六号、勉誠出版、二〇〇〇年)などがある。
- (4) 一七五九年創建の久米島の天后宮(天妃宮)については本稿の目的からはすれるので考察の対象とはしない。李獻璋前掲書の「姑米島の天后宮」、窪徳忠前掲書などを参照していただきたい。
- (5) 以下、『琉球国由来記』の引用は、外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』(角川書店、一九九七年)による。
- (6) 琉球の道教的信仰については窪徳忠前掲書と同じ窪徳忠の『中国文化と南島』(第一書房、一九八一年)が詳しい。久米村に関する研究は少なく、代表的なものをあげると、池宮正治・小渡清孝・田名真之『久米村——歴史と人物』(ひるぎ社、一九九三年)、田名真之「近世久米村の成立と展開」(『新琉球史 近世編(上)』、琉球新報社、一九八九年)がある。
- (7) 窪徳忠前掲書(注1)。
- (8) 『球陽』尚敬王十七年(一二二九)条。以下、『球陽』の引用は、球陽研究会編『球陽(原文編、読み下し編)』(角川書店、一九七四)による。
- (9) 徐葆光『中山伝信録』に「請雨、毎於十月墾種後、先三日齋、各官皆詣龍王殿及天尊廟拜請。又請龍王神

像升龍舟、至豐見城、設雨壇拜請」とある。以下、使琉球記の引用は、夏子陽『使琉球録』、胡靖『琉球記』、張学礼『中山紀略』、汪楫『使琉球雜錄』、徐葆光『中山伝信録』、周煌『琉球国志略』は、善本を収録する黄潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編』（北京圖書館出版社、二〇〇〇年）に、李鼎元『使琉球記』は嘉慶七年刊、師竹齋版（京都大学文学部蔵）による。これらの使琉球録については、夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』（榕樹書林、一九九九年）を参照。また原田禹雄による訳注本が刊行されていて有益である。

- (10) 真榮平房昭「近世琉球における航海と信仰―「旅」の儀礼を中心に―」（『沖縄文化』第二八卷一号、一九九三年一月）。

- (11) 「凡冊使往返、皆於斯起福醺、五晝夜」。

- (12) 汪楫『使琉球雜錄』「使臣朔望必肅謁香火。視下宮較盛」。

- (13) 汪楫『使琉球雜錄』「宮亦就圯」。

- (14) 「入館後、涓吉鼓樂儀從、奉迎船上天妃及聖公聖公、水神、詳汪使錄中、諸海神之位供於上天妃宮內、朔望日行香」。

- (15) 「始至館第二日、先詣孔廟行香、次至天妃宮。冬至、則設萬歲龍亭於廟左明倫堂、使臣以次行禮訖、亦載謁夫子像、朔望則否。天尊廟、祀雷聲普化天尊。汪録、永樂中、貢使自京師塑像歸、禱必應。故第二日亦往行香。朔望則不再至云」。

- (16) 『琉球国旧記』は、『琉球資料叢書 第三卷』（鳳文書館、一九四〇年）所収のものを用了。原田禹雄によ

る訳注本『琉球国旧記』（榕樹書林、二〇〇五年）がある。

（17）「中山孔子廟碑記」（『琉球国碑文記』所収）、「唐栄旧記全集」（『琉球国由来記』所収）。

（18）天尊廟と龍王殿の沿革や所在について補足しておきたい。「唐栄旧記全集」は龍王殿について「遺老の伝説によると、この龍王殿は昔、中見城にあった。ただ、いつの時代、いずれの年に上天妃宮に移建したかはわからない。龍王は風雨の神であり、航海するものは多くこの神を祭り祈る。これによつて考えるに、天妃宮をつくつたとき、あるいは龍王殿を中見城に建てたのであろう」という。鄭謙が一七三一年に著した碑文「琉球国創建天尊廟天妃宮龍王殿関帝祠総記」（引用は塚田清策『琉球国碑文記』、啓学出版株式会社、一九七〇、による）も龍王殿について同様の内容を記し、ついで上天妃宮への移転の理由と年代について「海風の為に吹壊し、修葺に堪えず、故に崇禎初年、議して茲に移すと云う」と述べる。龍王殿の移建は崇禎初年（二六二八）と伝えられていたようである。また一七〇〇年の修理について「天妃宮（上天妃宮）と同じく神堂を大修す」とする。

上天妃宮への移転時期について、「唐栄旧記全集」が不明とするのに対し、「琉球国創建天尊廟天妃宮龍王殿関帝祠総記」は崇禎初年と明記する。しかしそれは正しい伝承ではないようであり、法司官以下の諸社寺参詣の史料は、龍王殿が沖の権現の近くではなく、両天妃宮の近くにあったことを示しており、したがって龍王殿の移建が一六二七年以前であったことは明らかであろう（第五章3節参照）。

以上から、龍王殿は天妃宮を創建した十五世紀初頭ころに那覇港の北の突堤、三重城の二つ目の台場で

ある仲三重城に創建され、その後十七世紀初頭に上天妃宮に移築され、一七〇〇年に上天妃宮とともに修理がなされた。

つぎに天尊廟の創建について、「唐栄旧記全集」は「三十六姓、始めて邑宅を営むとき、或いは此の廟を斯に建てるか」と推測する。すなわち、三十六姓が屋敷を与えられたという洪武二十五年（一三九二）、唐栄の西門（北門）の外、いいかえると波上の地に創建されたと考えているのであろう。「唐栄旧記全集」よりも時期の古い、一六八三年の冊封使汪楫の『使琉球雜録』は、天尊廟を次のように記している。

天尊廟は、雷声普化天尊を祀る。波上を去ること遠からず。国に道士無く、香火を奉ずる者も亦僧なり。相伝うるに、永楽中、貢使、京師より塑像して以て帰り、祈れば必ず応ずる有りと。崇禎末年、中国に故するもの多く、貢使久しく阻して還らず。王尚質、特に命じて之を新たにす。「渡唐の船を通ずるを祈り、懋遷の願を遂ぐるを冀う」の語、上棟文中に見ゆ。旧録（一六六三年の冊封使張学礼の『中山紀略』）のことは此の地を紀して三清殿と為すも、殿中に三清像無し。国人も亦此の称無し。

これによつて、天尊廟が波上宮の近くにあること、琉球に道士がいなかったため僧が香火を奉じていること、尚質王（在位一六四八〜一六六八）が渡唐船の航海安全を祈願して神堂を新築したことなど、いくつもの情報が見られるが、ここでは「相伝うるに、永楽中、貢使、京師より像を塑して以て帰り、祷れば必ず応ずる有り」とに注目したい。鄭謙の「総記」にも同様の由來が記されているが、汪楫を祖述したものではなく、汪楫が「相伝うるに」と記するように、昔から久米村に広く受け継がれていた伝承なのであろう。窪徳忠は、こ

- の記事などから天尊廟の創建を永樂年間（二四〇三〜二四）と推測している（窪徳忠前掲書（注一）、一九二頁）。
- (19) 沖繩県立図書館史料編集室編（訳注和田久徳）『歴代宝案 訳注本第一冊』、沖繩県教育委員会、一九九四年。
- (20) 李獻璋前掲書、「王家命建の下天妃宮」、四七八頁〜四八一頁。
- (21) 東恩納寛惇『南島風土記』の「天妃」の項、原田禹雄訳注『汪楫 冊封琉球使録 三篇』（榕樹書林、一九九七年）所収の『使琉球雜録』巻二、天妃宮の訳と注を参照、六三頁。
- (22) 周煌『琉球国志略』、上天妃宮の項「統全海之洪波、俯順人情、應念東西南北。綜歷朝之寶冊、仰覩聖徳、一心忠孝慈仁」。沖繩県立博物館に現存する（沖繩県教育庁文化課編『扁額・聯等遺品調査報告書』（沖繩県文化財調査報告書第四十四集、沖繩県教育委員会、一九八三年、五五頁）。
- (23) 『球陽』尚穆王八年（一七五九）の条に「天妃は、曾て封を歴受して天后と称す。然れども本国之れを知らず。此の年に至り、始めて天后宮と称す」とあるように、この年以降、天妃宮は天后宮と改称された。
- (24) 『琉球王国評定所文書』第九卷（浦添市、一九九三年）、五五三頁、文書番号一六八。
- (25) 周煌『琉球国志略』「冊使徐葆光書聯云、那覇唐營、並峙兩宮分上下、夏來冬往、安流一至合華彝」。
- (26) 徐葆光『中山伝信録』所収の「天使館図」には天使館に隣接して下天妃宮が描かれている。
- (27) 「天妃宮有三」という記載には周煌も創建にかかわった久米島の天妃宮が含まれている。
- (28) 近世の下天妃宮について補足すると、一六四三年八月に「神宮を大修」し、一六六一年に平氏友親雲上景友の寄進によつて門前に石神二像を建立したことが「総記」に記されている。『球陽』尚質王十四年（一

六六一) 条にも、「十四年、平万祉、仁王石像を下天妃門内に奉安す。天妃宮の門は、素、仁王木像を安んず。是の年に至り、神像敗壞す。平万祉(友寄親雲上景友)改めて仁王石像を奉ずるの事を題奏す。幸に論允を蒙る。資金を喜損し、薩州より其の像を請来して、此の門内に奉安す」とある。汪楫は、大修理以来四十年が過ぎた一六八三年の下天妃宮の姿を、「宮もまた破れかけている」と述べている。徐葆光は「宮門前、石神二。入門甬道、至神堂三十歩許」、周煌は「門左右、石神二。甬道寛廣、殿宇宏敞」とその姿を記し、徐葆光はさらに一四五七年の「天妃宮」銘の鐘が掛けられていたことを銘文とともに記録している。『球陽』尚敬王十六年(一七二八)の条によると、天使館の隣にあつた親見世の「菩薩」(観音像、あるいは天妃像)を下天妃宮に安置している。

(29) 伊地知貞馨『沖繩志』(明治一〇年、一八七七年)所収の「那覇及久米村図」による。

(30) 窪徳忠『中国文化と南島』(第一書房、一九八一年、二四五～二四六頁)。

(31) 近代の様子を補足すると、下天妃宮は明治十三年(一八八〇)に師範学校の敷地となり、神体は上天妃宮に移された。その上天妃宮は、明治一〇年には久米村の西、現在の天妃小学校の位置に移っていたが(那覇及久米村図)、(注29)、明治三二年(一八九九)に天妃尋常高等小学校の敷地となり、校舎が建築されたため、下天妃宮の神体や竜王殿、関帝廟とともに波之上の天尊廟の敷地に移築された。天妃小学校には今も上天妃宮の名残を留める石門が保存されている。

(32) 「遊東禅寺。寺在久米東北。前臨下(上)天后宮。後倚平山、六松盤若磊」。

(33) 「上天妃宮、在孔子廟之右。深行曲巷、夾巷墾惡石為牆、石面皆如觶饌。因悟、一統志所云、王居壁下、多聚觶饌、殆緣此訛傳耳。宮外石埠轟起、墻壁巍然。內有榕樹、垂陰數畝」。

(34) 近世の上天妃宮は、一七〇〇年に「神宮を大修」し、一七一五年に程順則が寄進して門内に石神像を建立したことが鄭謙「総記」にみえる。徐葆光『中山伝信録』は当時の姿を、「宮在曲巷中、門南向、神堂東向。門旁、亦有石神二。進門、上甬道。左右寛數畝、繚垣周環。正中爲天妃神堂、右一楹爲關帝神堂、右爲僧寮。塔下、鐘一所。大門左有神堂、上嚮供龍神」と書き留める。周煌『琉球国志略』は、「門南向、亦有石神二。甬道左右寛數畝、周圍繚垣。正中爲天妃神堂、右一楹祀關帝、左爲久米幼童誦讀地」とし、また所蔵の鐘の銘は上天妃宮と同文であるという。

(35) 「那覇之東北三里有三清殿。……三清殿東有天妃廟。廟雖窄隘、幽邃可觀。廟東有演武場。場南有長虹橋。例えば汪楫『使琉球雜錄』に「天尊廟祀雷聲普化天尊。去波上不遠」、徐葆光『中山伝信録』に「天尊廟、在護國寺下、供玉皇。有鐘、爲景泰七年丙子九月二十三日鑄、銘文與天妃宮同」とある。

(37) 張学礼『中山紀略』「歸行、王請留匾額、正殿東南屏藩、家廟河山帶礪、三清殿蒼生司命、天妃廟中外慈母、王公亦有贈匾」。

(38) 「入門甬道、至神堂三十步許。堂内有崇禎六年册使杜三策、楊掄慈航普濟匾、順治六年招撫司謝必振普濟生靈匾、康熙二年癸卯册使張學禮、王垓普濟羣生匾」。

(39) 徐葆光『中山伝信録』「天妃堂内、有崇禎六年册使杜三策、楊掄立德配玄穹、康熙二年癸卯册使張學禮、王

瑛生天福靈」。なお周煌『琉球国志略』は、張學禮・王瑛の額を「生而神靈」と読む。

- (40) 徐葆光『中山伝信録』、下天妃宮「大門上書靈應普濟神祠、則萬曆三十四年冊使夏子陽、王士禎所立也」、上天妃宮「梁上有靈應普濟神祠之額、乃萬曆中冊使夏子陽、王士禎所立也」。周煌『琉球国志略』、下天妃宮「門南向。明夏子陽、王士禎立靈應普濟神祠額」、上天妃宮「門額、舊夏子陽、王士禎書靈應普濟神祠、年久匾失。康熙中、徐葆光取宋宣和及元天歷兩賜額、合書之曰順濟靈慈之宮」。

- (41) 「下天妃廟、歷年既久、無從稽考焉。幸廟内有一片旧板僅存。而板面、書永樂二十二年造七字。固足徵焉。且見其鐘銘、乃鑄于景泰八丁丑年。由是考之、自永樂二十二年、至景泰丁丑年、凡歷二十四年。然則建廟也先、鑄鐘也後、而有得其序次。則于永樂年間、乃造斯廟也無疑矣」。

- (42) 前掲『大日本地名辞書』、『南島風土記』、那覇の天妃の項。

- (43) 「杜公録云、天尊廟、昔閩人移居中山者、創建廟祠、爲國祈福。以此考之、上天妃廟・龍王殿、亦此時建之歟」。

- (44) 李獻璋前掲書、第三章「唐人の琉球定住と媽祖の伝来」、那覇市企画部文化振興課編『那覇市史 通史編第一卷 前近代史』（那覇市役所、一九八五年）。

- (45) 汪楫『使琉球雜録』が「下天妃宮與天使館隣並。門外即館垣之左地、寬平可數十畝。前有大石池。那覇居民、向以此爲市易之所。今徒馬市街」と記すように、天使館や下天妃宮の前の広場は那覇の町の中心であり、女たちによる露天の市は有名である。ここにも場の特質が表れている。

- (46) 天使館の創建された年は、『琉球国由来記』・『琉球国旧記』が尚巴志王の冊封時の永樂年間（一四〇三〜一四

かとし、『球陽』が「察度王始めて中朝に通ず。爾よりして後、天使数次来臨す。武寧に至り、始めて冊封の大典を受け、永く著して例と為す。此れを以て之れを考ふるに、則ち天使館は、武寧王此の館を創建し、以て冊使を駐むること知るべし」(同王九年附条)と、武寧王(一三九六世子→一四〇六中山王)の冊封時とする。『球陽』は天使館の起源を考証したものであり、那覇の天使館の創建は『琉球国由来記』や『琉球国旧記』のいうように、尚巴志王代であらう。

- (47) 小葉田淳「歴代宝案について」、『史林』四六巻四号(一九六三年七月)初出、『歴代宝案研究』創刊号(沖縄県立図書館、一九九〇年三月)に再録。

- (48) 柴山の宗教的・文化的活動を記した「大安禪寺碑記」・「千仏靈閣碑記」(郭汝霖『使琉球記』所収)は、後の冊封使の郭汝霖や蕭崇業の使琉球録に掲載されることによつて後世に伝承された。

- (49) 「千仏靈閣碑記」に「於是重修弘仁普濟之宮、引泉鑿井於宮之南、鼎造大安千佛靈閣」。

- (50) 李獻璋前掲書。

- (51) 東恩納寛惇『南島風土記』。

- (52) 「沿湖而東、陟山半、有天妃新殿。造自郭公。凡冊使往返皆於斯起福醮、五晝夜」。

- (53) 「宣徳・正統之間、重建上天妃宮于宮中」。

- (54) 上里隆史「古琉球・那覇の「倭人」居留地と環シナ海世界」、『史学雑誌』一一四巻七号、二〇〇五年七月。

- (55) 高橋康夫「古琉球の環境文化——禅宗寺院とその境致——」、『都市・建築・歴史』4 中世の文化と場、

東京大学出版会、二〇〇六年。

(56) 一六八三年の汪楫『使琉球雜錄』は天尊廟について「国に道士無く香火を奉ずる者も亦僧なり」と記す。

(57) 「夏給諫子陽使録云、此爲嘉靖中冊使郭給事汝霖所建」。ただし、知られている夏子陽『使琉球録』（黃潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編』（全三冊、北京圖書館出版社、二〇〇〇年十月）所収本）には徐葆光が引用するような記事はなく、おそらく胡靖『琉球記』と混同したのであろう。

(58) 齊鯤・費錫章『続琉球国志略』も同じ。また田山花袋編『琉球名勝地誌』（博文館、一九〇一年）の「天女祠」は久米村の上天妃宮の創建について周煌『琉球国志略』をほぼ引用、記述する。

(59) 胡靖『琉球記』「創自嘉隆間、覺傾頽略加脩葺」。

(60) 「上天妃宮」銘の鐘は、『琉球国由来記』が「上天妃廟」の項にその積文をあげ、周煌『琉球国志略』に「有鐘一、鐫文與下天妃宮同」とあることから、久米村の上天妃宮に伝えられていたことがわかる。

(61) 「景泰年間鑄巨鐘、以懸于兩天妃宮。而祭祀天后時、撞鐘拜礼耳。至于是年、始定曉暮撞鐘以報時刻」。

(62) この願望が実現されたことが、徐葆光『中山伝信録』に「設學於上天妃宮、以教七歳以上之初學者」、周煌『琉球国志略』に「久米七歳以上初學者、則設塾於上天妃宮以教之」とあることから知られる。上天妃宮のどこかは『中山伝信録』に記載はないが、一七五六年の周煌『琉球国志略』によると、「天妃神堂」の左の建物を「久米幼童誦讀地」としている。

(63) 泉田英雄『海域アジアの華人街——移民と植民による都市形成』、学芸出版社、二〇〇六年。